

谷

宮沢賢治

青空文庫



檜ならわたり渡わたのこの崖がけはまつ赤でした。

それにひどく深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてただ青い梢こすえと白樺しろかばなどの幹が短く見えるだけでした。

向う側もやっぱりこつち側と同じようである毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入っていました。ぎざぎざになつて赤い土から喰はみ出していたのです。それは昔山むかしの方から流れて走つて来て又火山灰またに埋うずもれた五層の古い熔岩流ようがんりゅうだったのです。

崖のこつち側と向う側と昔は続いていたのでしようがいつかの時代に裂さけるか罅われるかしたのでしよう。霧きりのあるときは谷の底はまつ白でなんにも見えませんでした。

私をはじめてそこへ行つたのはたしか尋常じんじょう三年生か四年生のころです。ずうつと下の方の野原でたった一人野葡萄のぶどうを喰たべていましたら馬番の理助が鬻金うこんの切れを首に巻いて木炭すみの空俵すまをしようつて大股おおまたに通とおりかかったのです。そして私を見てずいぶんな高声で言つたのです。

「おいおい、どこからこぼれて此処ここらへ落ちた？ さらわれるぞ。葦きのうんと出来る処ところへ連れてつてやろうか。お前なんかには持てない位葦きのある処へ連れてつてやろうか。」

私は「うん。」と云いいました。すると理助は歩きながら又言いいました。

「そんならついて来い。葡萄などもう棄すてちまえ。すっかり唇くちびるも齒むらさきも紫むらさきになつてる。早くついて来い、来い。後おくれたら棄すてて行くぞ。」

私はすぐ手にもつた野葡萄の房ふさを棄すていっしんに理助について行きました。ところが理助は連れてつてやろうかと云つても一向私などは構かまわなかつたのです。自分だけ勝手にあゝるいて途方もない声で空に嘯ささぶりつくように歌つて行きました。私はもうほんとうに一生けんめいついて行つたのです。

私どもは柏かしわの林の中に入りました。

影かげがちらちらちらちらして葉はうつくしく光りました。曲つた黒い幹の間を私どもはだんだん潜くぐつて行きました。林の中に入つたら理助もあんまり急がないようになりました。又じつさい急げないようでした。傾けい斜しゃもよほど出てきたのでした。

十五分も柏の中を潜つたとき理助は少し横の方へまがつてからだをかがめてそこらをしらべていましたが間もなく立ちどまりました。そしてまるで低い声で、

「さあ来たぞ。すきな位とれ。左の方へは行くなよ。崖だから。」

そこは柏や櫛の林の中の小さな空地でした。私はまるでぞくぞくしました。はぎぼだし

がそこにもここにも盛りさかになつて生えているのです。理助は炭俵をおろして尤もつともらしく口をふくらせてふうと息をついてから又言いました。

「いいか。はぎぼだしには茶いろのと白いのとあるけれど白いのは硬かたくて筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ。」

「もうとつてもいいか。」私はききました。

「うん。何へ入れてく。そうだ。羽織へ包んで行け。」

「うん。」私は羽織をぬいで草に敷しきました。

理助はもう片っぱしからとつて炭俵の中へ入れました。私もとりました。ところが理助のとるのはみんな白いのです。白いのばかりえらんでどしどし炭俵の中へ投げ込こんでいるのです。私はそこでしばらく呆あきれて見ていました。

「何をぼんやりしてるんだ。早くとれとれ。」理助が云いました。

「うん。けれどお前はなぜ白いのばかりとるの。」私がききました。

「おれのは漬物つけものだよ。お前のうちじや蕈きのこの漬物なんか喰べないだろうから茶いろのを持つて行った方がいいやな。煮にて食うんだらうから。」

私はなるほどと思いましたので少し理助を気の毒なような気もしながら茶いろのをたく

さんとりました。羽織に包まれないようになってもまだとりました。

日がたって秋でもなかなか暑いのでした。

間もなく藪も大ていなくなり理助は炭俵一ぱいに詰めたのをゆるく両手で押すようにしてそれから羊歯の葉を五六枚のせて縄で上をからげました。

「さあ戻るぞ。谷を見て来るかな。」理助は汗をふきながら右の方へ行きました。私もついて行きました。しばらくすると理助はびたつととまりました。それから私をふり向いて私の腕を押えてしまいました。

「さあ、見ろ、どうだ。」

私は向うを見ました。あのまつ赤な火のような崖だったので。私はまるで頭がしいんとなるように思いました。そんなにその崖が恐ろしく見えたのです。

「下の方もぞかしてやろうか。」理助は云いながらそろそろと私を崖のはじにつき出しました。私はちらつと下を見ましたがもうくるくるしてしまいました。

「どうだ。こわいだろう。ひとりで来ちやきつとここへ落ちるから来年でもいつでもひとりで来ちやいけないぞ。ひとりで来たら承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」

理助は私の腕をはなして大へん意地の悪い顔つきになって斯う云いました。

「うん、わからない。」私はぼんやり答えました。

すると理助は笑って戻りました。

それから青ぞらを向いて高く歌をどなりました。

さっきの蓆を置いた処へ来ると理助はどっかり足を投げ出して座すわって炭俵をしまいました。それから胸で両方から繩なわを結んで言いました。

「おい、起して呉れ。」

私はもうふところへ一杯いっぱいにきのこをつめ羽織ふろしきを風呂敷ふし包みつつのようにして持って待っていました。が斯う言われたので仕方なく包みを置いてうしろから理助の俵を押してやりました。理助は起きあがって嬉うれしそうに笑って野原の方へ下りはじめました。私も包みを持ってうれしくて何べんも「ホウ。」と叫さけびました。

そして私たちは野原でわかれて私は大威張おおいばりで家に帰ったのです。すると兄さんが豆まめを叩たたいていましたが笑って言いました。

「どうしてこんな古いきのこばかり取って来たんだ。」

「理助がだつて茶いろのがいいって云ったもの。」

「理助かい。あいつはずるさ。もうはぎぼだしも過ぎるな。おれもあしたでかけるかな。」

私は又ついでに行きたいと思つたのでした。次の日は月曜ですから仕方なかつたのです。そしてその年は冬になりました。

次の春理助は北海道の牧場へ行つてしまいました。そして見るとあすこのきのこはほかに誰かに理助が教えて行つたかも知れませんがまあ私のものだったので。私はそれを兄にもはなしませんでした。今年こそ白いのをうんととつて来て手柄を立ててやろうと思つたのです。

そのうち九月になりました。私ははじめたつた一人で行こうと思つたのですがどうも野原から大分奥でこわかつたのです。第一どの辺だったかあまりはつきりしませんでした。から誰か友だちを誘おうときめました。

そこで土曜日に私は藤原慶次郎にその話をしました。そして誰にもその場所をはなさないなら一緒に行こうと相談しました。すると慶次郎はまるでよろこんで言いました。「櫛渡なら方向はちゃんとわかつているよ。あすこでしばらく木炭を焼いていたのだから方角はちゃんとわかつている。行こう。」

私はもう占めたと思ひました。

次の朝早く私どもは今度は大きな籠を持ってでかけたのです。実際それを一ぱいとるこ



とを考えると胸がどかどかするのです。

ところがその日は朝も東がまつ赤でどうも雨になりそうでしたが私たちが柏の林に入つたころはずいぶん雲がひくくてそれにきらきら光つて柏の葉も暗く見え風もカサカサ云つて大へん気味が悪くなりました。

それでも私たちはずんずん登つて行きました。慶次郎は時々向うをすかすように見て

「大丈夫だよ。<sup>だいじょうぶ</sup>もうすぐだよ。」と云うのでした。実際山を歩くことなどは私よりも慶次郎の方がずうつとなれていて上手でした。

ところがうまいことはいきなり私どもはぎざぼだしに出<sup>で</sup>つ会<sup>く</sup>わしました。そこはたしかに去年の処ではなかつたのです。ですから私は

「おい、ここは新らしいところだよ。もう僕<sup>ぼく</sup>らはきのこ山を二つ持ったよ。」と言つたのです。すると慶次郎も顔を赤くしてよろこんで眼<sup>め</sup>や鼻や一緒になつてどうしてもそれが直らないという風でした。

「さあ、取つてこよう。」私は云いました。そして白いのばかりえらんで二人ともせつせと集めました。昨年のことなどはすっかり途中で話して来たのです。

間もなく籠<sup>かご</sup>が一ぱいになりました。丁度そのときさつきからどうしても降りそうに見え

た空から雨つぶがポツリポツリとやって来ました。

「さあぬれるよ。」私は言いました。

「どうぞせつぶぬれだ。」慶次郎も云いました。

雨つぶはだんだん数が増して来てまもなくザアツとやって来ました。櫛の葉はパチパチ鳴り<sup>しずく</sup>雫の音もポタツポタツと聞えて来たのです。私と慶次郎とはだまって立ってぬれました。それでもうれしかったのです。

ところが雨はまもなくぱたつとやみました。五六つぶを名<sup>なご</sup>残りに落してすばやく引きあげて行ったという風でした。そして陽<sup>ひ</sup>がさつと落ちて来ました。見上げますと白い雲のきれ間から大きな光る太陽が走って出ていたのです。私どもは思わず歓呼の声をあげました。櫛や柏の葉もきらきら光ったのです。

「おい、ここはどの辺だか見て置かないと今度来るときわからないよ。」慶次郎が言いました。

「うん。それから去年のもさがして置かないと。兄さんにでも来て貰<sup>もら</sup>おうか。あしたは来れないし。」

「あした学校を下<sup>さが</sup>つてからでもいいじゃないか。」慶次郎は私の兄さんには知らせたくな

い風でした。

「帰りに暗くなるよ。」

「大丈夫さ。とにかくさがして置こう。崖はじきだろうか。」

私たちは籠はそこへ置いたまま崖の方へ歩いて行きました。そしたらまだまだだと思つていた崖がもうすぐ眼の前に出ましたので私はぎくつとして手をひろげて慶次郎の来るのをとめました。

「もう崖だよ。あぶない。」

慶次郎ははじめて崖を見たらしくいかにもどきつとしたらしくしばらくなんにも云いませんでした。

「おい、やつぱり、すると、あすこは去年のところだよ。」私は言いました。

「うん。」慶次郎は少しつまらないというようにうなずきました。

「もう帰ろうか。」私は云いました。

「帰ろう。あばよ。」と慶次郎は高く向うのまつ赤な崖に叫びました。

「あばよ。」崖からこだまが返つて来ました。

私はにわかに面白おもしろくなつて力一ぱい叫びました。

「ホウ、居たかあ。」

「居たかあ。」崖がこだまを返しました。

「また来るよ。」慶次郎が叫びました。

「来るよ。」崖が答えました。

「馬鹿。」私が少し大胆だいたんになつて悪口をしました。

「馬鹿。」崖も悪口を返しました。

「馬鹿野郎。」慶次郎が少し低く叫びました。

ところがその返事はただごそごそつとつぶやくように聞えました。どうも手がつけられないと云つたようにも又そんなやつらにいつまでも返事していられないなど自分ら同志で相談したようにも聞えました。

私どもは顔を見合せました。それから俄にわかに恐こわくなつて一緒に崖をはなれました。

それから籠を持ってどんどん下りました。二人ともだまってどんどん下りました。雫ですつかりぬればらや何かに引つかかれながらなんにも云わずに私どもはどんどんどんどん遁にげました。遁にげれば遁にげるほどいよいよ恐こわくなったのです。うしろでハツハツハと笑うような声もしたのです。

ですから次の年はとうとう私たちは兄さんにも話して一緒にでかけたのです。



# 青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷  
宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>